

「都市」のモダニズム

伊藤 大介 (建築史家・東海大学国際文化学部教授)



伊藤 大介 (いとう・だいすけ)

1956年東京生まれ。東京大学大学院博士課程修了・工学博士。1984～86年フィンランド・ヘルシンキ工科大学に留学。

主な著書に『アールトとフィンランド』(単著、丸善、1990)、『ヘルシンキー森と生きる都市』(共著、市ヶ谷出版社、1997)、『図説年表・西洋建築の様式』(共著、彰国社、1998)、『北欧インテリア・デザイン』(共著、平凡社、2004)、『近代化の波及』(共著、東京大学出版会、2006)、『北欧学のすすめ』(共著、東海大学出版会、2010)、『北欧の建築遺産』(単著、河出書房新社、2010)、『北欧文化事典』(共著、丸善、2017)、など。

①アールトの出発と「都市」へのこだわり

◆フィンランド人の中の「フィンランド系」と「スウェーデン系」の問題

フィンランド人の姓には、大きくフィンランド系とスウェーデン系のものがある。その背景には、中世以来のフィンランドにスウェーデン人が支配者として入り込み世代を重ねてきたという歴史的事実がある。この2つの民族系列や語族はそもそも大きく異なり、2つの言語の違いを少しでも解する人ならば、どちらに属する姓なのかは語形からすぐ区別できる。

このことは、ナショナル・ロマンティズム期の建築家であるエリエル・サーリネンやラーシュ・ソングを研究していても、看過できない問題であった。20世紀初頭のフィンランドは列強の政治的圧迫の中で、民族の独立をめざし新しい建築像を作り上げようとしていた。そのために重要だったのは、当然「フィンランド」というアイデンティティの確立の方法であった。そして、ナショナル・ロマンティズムは、2つの方法を見出したのである。

1つ目は、それまで数世紀にわたって主にスウェーデンを経由して導入に努めてきた文明化をさらに押し進めて先進国の仲間入りを果たす方法。2つ目は、むしろそうした方向性を反省して、民族のルーツに立ち返って自国のあり方を問い直す方法であった。前者はヨーロッパ志向の「都市」と一体化させた建築の発展をめざし、後者はフィンランド志向の「自然」とともにある建築の再構成を目標とした。そして研究で気づいたのは、それぞれの方向性を担う建築家たちが、どうやらその出自によって大きく色分けできることであった。つまり、フィンランド系を代表する建築家のサーリネンは一貫して都市派で、例えば駅前商業地区の開発に邁進し、スウェーデン系のソングは自然派として、例えば森の中の住環境作りに執心した。

ただし注意しなくてはならないのは、これが上に述べたような歴史的経緯から想像され

る色分けとは、ちょうど「逆」になっている点である。森にルーツをもつフィンランド系が都市志向、都市文明を享受してきたスウェーデン系が自然志向、というわけである。前者はごく素直な姿勢で進歩をめざし、後者はいわば異国に身を置いての立ち位置に拘ったとでも言えようか。近代になってからのアイデンティティ創造という課題ゆえの意図的選択のおもしろさと言えようか。

これは近代特有の文化の二重性にもつながる深い問題で、もちろん姓からわかる民族的ルーツのみで彼らの行動様式がすべて色分けできるほど単純ではない。出自を見せないためにあえて改姓した建築家の例もある。しかし、あるひとつの傾向として、建築家たちの行動を解釈するヒントをここに見出すことは許されよう。

そして、アールトの場合は? …「アールト」というのは、まさにフィンランド系の姓なのである。

ただしアールトは、ナショナル・ロマンティズムより後のモダニズム世代の建築家として、いくらか複雑な軌跡をたどる。つまり彼は、意図的にか無意識のうちにか、「都市」から「自然」へとアイデンティティ表現の場をずらしてゆくように思うのである。

◆アールトの活動の舞台:

都市ユヴァスキュラから都市トゥルクへ

アールトに関わりの深い最初のフィンランド都市は、中央フィンランド地方の内陸にあるユヴァスキュラである。西のスウェーデンからも東のロシアからも遠いことから、生粋のフィンランド文化圏の中核都市とされる。フィンランド語を用いた教育の拠点となる旧師範学校もここにあった。アールトは5歳以降の少年時代を家族とここで過ごし、工科大学建築学科で学んだ一時期こそ首都ヘルシンキで暮らしたが、卒業後に再びここへ戻った。そして、小規模ながらフィンランドの土着文化の色濃いユヴァスキュラで、1923～27年に最初の設計事務所を開いた。

年輪的に言えば20歳代だったアールトの

主要作品としては、ユヴァスキュラ労働者会館(1924-25)がモダニズム以前の北歐古典主義に属し、特に力の入った密度の高い作品であろう。その他には既存の改修や小規模な木造ログハウスなどが多く、ユヴァスキュラ周辺地域はまさに建築家アールト揺籃の地の役割を果たした。一方で世界的建築家となった晩年のアールトが、ヘルシンキの建築界の中で孤立して苦しんだ時に彼を支えたのも、またこの地域からの仕事の依頼であった。ユヴァスキュラは、アールトを温かく包む終生変わらぬ故郷であった。

しかし若き野心に富むアールトは、ユヴァスキュラ以上の都市を求めてフィンランド西海岸の古都トゥルクへと移る。ここで1927～33年に開設した2つ目の設計事務所での活動を通じて、彼はパイミオのサナトリウム(1929-33)、ヴィープリの図書館(1927-35)といった初期モダニズムの傑作を完成させ、ヨーロッパじゅうから注目を集める建築家となってゆくのである。

◆トゥルクの向こうに見えていたストックホルム、そしてヨーロッパのモダニズム

トゥルクは、フィンランドに数少ない中世都市の中でも、スウェーデン支配期に長らく首都であった由緒を誇る。本格的なゴシック様式のトゥルク大聖堂もあり、歴史の香り高い都市である。

アールトが大学時代に慣れ親しんだ首都ヘルシンキではなく、トゥルクに身を置いたのには大きな理由があった。スウェーデンの首都ストックホルムに近いこの都市を選ぶことで、北歐で最先端の建築動向に触れ、さらにはその向こう側にあるヨーロッパのモダニズムも見据えていたのである。実際、1929年のフランクフルトでの第2回CIAMに、アールトが参加したことが知られている。翌1930年には、ストックホルムでスウェーデンの建築家アスプルンドが会場計画を行った博覧会が開催され、北歐に初めて本格的にモダニズム建築が導入された。アールトは当然のごとくその会場にも足を運んでいる。



上/タンメカン邸・連続窓のある庭側外観
左下/タンメカン邸・暖炉のあるリビングルーム 右下/タンメカン邸・リビングからダイニングを見る (写真全て筆者撮影)

この時期、北歐でモダニズム建築の先頭に立っていたアスプルンドは、間違いなくアールトにとってもヒーローであったろう。アスプルンドの下で働くこととアールトが一時期画策したことも知られている。しかし、2人の建築家の関係については、さらに検討の余地があると考えている。つまり、1930年代末に向かってアールトはむしろ次第にアスプルンドから距離を置いていったように私には解釈できる。それは北歐モダニズムの中で重要な「自然」への意識が、2人の間で微妙だが本質的な部分で異なることにアールトが気づいたからである。これについては、森のモダニズムを扱う連載の第3回で、アールトのマイレア邸(1939)とアスプルンドの森の火葬場(1940)の比較を通じて論じてみたい。

②タルトゥのタンメカン邸

◆エストニアという国、タルトゥという都市

アールトのトゥルク事務所期の住宅作品として、エストニアのタルトゥにあるタンメカン邸(1932)がある。なぜエストニアだったの

かのヒントとして、フィンランドとエストニアのつながりについて触れておこう。

2国はともにフィン=ウゴル語族に属し、民族的ルーツを共有する。フィンランド語にもっとも近いヨーロッパ言語は、スウェーデン語やデンマーク語ではなくエストニア語なのである。どちらも19世紀にはロシア領下にあったが、ロシア革命直後に独立を果たした。しかし、その後エストニアは1944年に再びソ連に併合され、1991年の再独立まで苦難の歴史を歩んだ。フィンランドはなんとかその難を逃れたが、一歩あやまれば同じ運命を辿っていても不思議はなかった。フィンランド側からエストニアへの強い連帯意識の所以である。

タルトゥという都市になじみのある日本人も、まだ多くはないだろう。首都タリンから南へ向かった内陸にある中世都市で、タリンが政治や商業的中心であるなら、タルトゥは古くからエストニアの文化的中心であった。1632年創立のタルトゥ大学が長い伝統を誇り、20世紀になってからも構造言語学・記号論の分野で「タルトゥ学派」が世界に知られていた。ただし、ソ連併合時代に郊外にソ連空軍基地があって、長らく外国人の立ち入り

が制限されていた。現在はその基地滑走路の跡地に国際コンペでエストニア国立博物館(2016)が建設され、その共同設計者として建築家・田根剛氏の名が含まれており、次第に日本にも知られるようになった。昨年訪れたタルトゥは、旧市街の修復も進み、トゥルクにも似た落ち着いた雰囲気心地よい歴史都市であった。ヨーロッパの周辺地域を歩くと、こうした埋もれていた歴史都市に思いがけず出会うことがあって心楽しい。

◆タンメカン邸の建設：

アールトの都市のモダニズムの表現

首都タリンから長距離高速バスでタルトゥへ向かうと、タルトゥ市街に入る直前に気持ちのよい緑の広がる住宅地を抜ける。1923年から計画が始まり1929年に正式認可されて建設が開始されたタハトヴェーレ田園都市で、タンメカン邸はこの一画にある。

アールトが1930年頃にトゥルクで、エストニア人地理学者のA.タンメカンと出会ったことがきっかけとなった。1932年に夫妻から個人住宅の依頼を受け、アールトはヨーロッパから吸収したばかりだったスタイルを採用することにした。ただし実は、陸屋根に白い壁と連続窓、そこにテラスやキャンピーを配するといった機能主義そのものといった姿は、新しい時代の象徴となる住宅を求めた夫妻側が熱望したものだったと言い、アールトにとっても理想的なクライアントであった。

1932年のうちに建設が始まり、翌年には夫妻が入居したが、1935年になっても未完成部分は残されていた。特に構造については、当時のエストニアの建設事情もあってレンガ壁を採用せざるを得なくなり、壁厚が変わった分部屋が狭くなってしまった。エストニアのソ連併合時代に荒廃し、アパートに改修されたり外観も寄棟屋根をかぶせられたりして見る影もなかったが、1998年にトゥルク大学財団が買い取り2000年までに修復した。現在はトゥルク大学とタルトゥ大学の共同利用施設になっている。

内部にこの住宅の特徴的部分が見られる。

リビングルームによってすべての空間が統合されており、ダイニングや書斎もここにゆるやかに結合して大きなスペースを形作っている。そのリビングの庭側の連続窓の中央下には暖炉が配置されていて、庭の景観を遮らないよう暖炉の煙道を横方向へ延ばす工夫がなされているのがおもしろい。(ただし、実際に暖炉が設置されたのは最近の改修後だった。)

タンメカン邸は、ヨーロッパの純粋な機能主義モダニズムへのアールトの共感が、もっとも直接的な形で現れている住宅だと言える。白一色の壁からなる外観(実はこれはレンガ壁漆喰塗りなのだが)は、アールト作品のイメージへの従来の固定観念を変えてくれるインパクトをもっていると言える。

③ヘルシンキの自邸

◆いよいよ首都ヘルシンキへ

タンメカン邸のあと、アールトは1933年にいよいよ設計事務所をヘルシンキへ移す。1976年に亡くなるまでここを本拠とし、その後も未亡人エリサに引き継がれ、彼女が死ぬ1994年まで事務所は存続した。

ヘルシンキは、ヨーロッパの歴史都市らしい容貌をもつトゥルクとは異なり、19世紀初頭に首都になることで発展の緒に就いた新興の近代都市であった。中心部には19世紀前

半の都市計画によって実現された新古典主義の整然とした街並みがあって、都市の骨格をなしている。20世紀初頭にはナショナル・ロマンティシズムの花崗岩の重い建築が都市に独特の陰影を与えたが、国が独立を果たした第一次世界大戦後は北欧古典主義による保守的な建築の牙城となっていた。ヘルシンキの都市形成史については、かつて「ヘルシンキ―都市と建築の系譜」(『ヘルシンキ／森と生きる都市』pp.26-61、市ヶ谷出版社、1997)と題して執筆したことがあるので、詳細はそちらに譲りたい。

1930年代から流入したモダニズムが戦前のヘルシンキで果たした役割は、限定的であったように思える。早くからここに拠点を置いて活動したアールトの盟友の建築家パウリ・E.プロムシュテットは、中心部テール湾周辺の開発計画案(1933)で水辺を生かした魅力的な都市空間を提案したが、保守派の抵抗によって圧殺され、建築家本人も早世した。アールトの場合、経営面での判断から首都への事務所移転は不可避だったにせよ、この新興都市自体に彼はどれほど魅力や期待を感じていたであろうか？

◆自邸の建設：

アールトのモダニズムの変容の始まり

自邸の立地については、1915年にエリール・サーリネンが開発計画を発表したムンキエミ=ハーガ地区に含まれていたことに注

目したい。サーリネンはヘルシンキ西郊の861ヘクタールの敷地に、当時のヘルシンキ全体の人口に匹敵する17万人規模の郊外住宅地を想定した。将来の人口予測や交通問題への対応に立脚した新しい理念に貫かれた計画であったが、第一次世界大戦の勃発によって完成しなかった。

そもそも、この国の20世紀初頭以来の自然の中での住宅形成の系譜にはかなりの厚みがある。ヨーロッパであれば、郊外的住環境の形成あるいはその延長上の田園都市構想の立案は、この時期の特徴ともいえよう。ただしフィンランドの場合、これが鉄道で結ばれた単なる都市外延部の開発に留まらない意味をもつ。都市の対極にある「森」の存在が強く意識され、この両者の吸引力の間で個々にバランスを取るよう生まれたのがこうした住環境であった。ムンキエミ=ハーガ地区も実現度こそ不十分に終わったが、やはりこのフィンランド固有の系譜に連なるものである。アールトはこれを意識していたのか？

ヘルシンキに移ったアールト一家は、当初しばらくは市内中心部のアパートで暮らしたが、1936年までに設計アトリエを併設したこの自邸を完成させて転居した。戦後は事務所員が増えたこともあり、1955年に自邸近くに専用の設計アトリエを作ったが、アールト個人は引き続き自邸併設のアトリエで仕事をすることも多かったという。現在の自邸とアトリエは、アールト財団に移管・公開されている。

全体は鉄筋コンクリートを用いながら、鉄柱や一部レンガ壁も組み合わせた混交構造となっている。外観の表現もタンメカン邸とは大きく変わった。設計アトリエ(公的部分)・1階リビングとダイニング(半公的部分)・2階ベッドルーム(私的部分)から成る全体構成を反映して、仕上げもそれぞれレンガ壁漆喰塗り・白い板壁・こげ茶色の板壁と使い分けられている。一方で内部は、これらの部分の空間が中央のリビングを介してつながり、大きな一体的な空間として使われるようになっている。

この自邸では、タンメカン邸のような「純粋な」美しさは後退したものの、代わってアールトラしい自在さや混交性による居心地よさが生まれてきており、アールトの都市のモダニズムが変容を始めていることが感じられる。ただし、木を多用するなど自然を取り込む意識が生まれていることは確かだが、材料としての扱いはまだ一種のコラージュの域を出ていない。自然との関係の曖昧さは、すでに述べた自邸の立地条件にも現れている。自然との本格的な共生意識が生まれるのは、次回に扱うマイレア邸を待たねばならない。

④初期アールトの「都市のモダニズム」

◆モダニズムと歴史都市：

ヨーロッパ周辺地域にとっては？

アールトが初期の活動で「都市のモダニズム」を推し進めるために、まずヘルシンキで

はなくトゥルクを活動の本拠に選び、あるいはタルトゥでの仕事に積極的だった背景を想像してみよう。するとそこには、周辺地域のモダニスト特有の理由がほの見える気がする。つまり、トゥルクがストックホルムに近かったこと、あるいはエストニアのタルトゥへ親近感があったことといったすでに挙げた理由の他に、実はこの両都市がフィンランド=エストニア地域では数少ないヨーロッパらしい歴史都市であった点が大きく作用しているように思われるのである。

中世城塞やゴシック様式の大聖堂を残し、あるいは古い大学が町に溶け込み、中心部の屋外市場が人々で賑わっている都市の雰囲気こそが、アールトがみずからの活動の場に求めていたものではなかったか。「モダニズムと歴史都市」という一見すると相異なる2つの文化は、実はどちらも、ヨーロッパに対して周辺地域の建築家たちが向けるまなざしの先にある憧れの対象として同列のものだった。彼らがモダニズムを通じて実現したかったことは、まずはヨーロッパにつながることであり、そのためには歴史都市こそが舞台としてふさわしかったのである。

そしてこの段階を経て、次にモダニズム建築が本来の内実を求めるようになるのは当然である。アールトもそこに至り、いよいよ本格的に「都市」に代わる自己の投影先として「自然」に目を向け始めるのである。

(続く)



自邸・仕上げを使い分けた庭側外観



自邸・様々な家具の持ち込まれたリビングルーム



自邸・リビングからダイニングを見る

(写真全て筆者撮影)